

魔孕学園怪奇譚

後編 (体験版)

……魔孕学園・学園長である暗魔誠一に対する妖子の第一印象は「以外に若いな」であった。これは「学園長」という肩書きだけで、勝手に年配者の姿形を想像していたからであるが、それでも驚きを禁じえなかった。

学園に到着した後、妖子は運転手に扮していた暗魔誠一に誘われ、学園長室に案内された。そしてそこで改めて依頼の内容を聞かされた後、頭を下げられて言われたのである。

「どうかこの学園を、魔の手から救ってください！」
と。

その人物がいま、自分の敵として、目の前に立っている。とんだ茶番劇もあったものだ、と思わずにはいられない。だが、不思議と驚きの気持ちは少なかった。

「あなたが……黒幕なの？」

「そうだ」

妖子の問いかけに対して、暗魔誠一は顔に微かな笑みを浮かべながら肯定した。

「ここにいる全ての妖魔の支配者にして、そこで気絶している役立たずの主人だよ。

まったく、自分の欲望を優先して課した「義務」を怠った挙句、隙を突かれて大敗を喫するとは……正直に言って、失望を禁じえないね」

そう言いながら、指をパチンと鳴らす。すると、触手の群れが動きだし、倒れたまま気絶して動かない児玉妃の身体を包み込み、覆い隠して飲み込んでしまった。

その様子を横目で見やりながら、鋭い口調で妖子が問いかける。

「彼女をどうするつもりなの？」

「なに、殺しはしないさ。下級とはいえ、彼女には妖魔を使役する才能があるんでね、意識を取り戻したらまた戦線に復帰させるさ。ただし、今度はきちんと「義務」を果たすよう、首に枷を付けてだがね」

「義務？」

「そう。妖魔の数を増やし、蟲毒の法で強化させる事を「義務」としてこなす代わりに、妖魔たちを使役して自分の性癖を満たす「権利」を与えてやったのだが、見事に前者は反故にされてしまったよ。まあ、妖魔の数はしっかりと増えたから、完全に反故にされていたとは言い難いがね。ま、特に気にしちやいないが」

そう言つて、暗魔誠一が腰を下ろす動作をした。すると、触手状の妖魔たちが、迅速な動作で身体を絡ませあいながら盛り上がり、彼が座る椅子となった。

妖子は、相変わらず戦いの構えを解かないまま、鋭い視線を暗魔誠一に送り続けている。

「妖魔を増やして……あなたは何を企んでいるの？」

妖子からの問いかけに、暗魔誠一はすぐには答えなかった。スーツの内ポケットからタバコとライターを取り出すと、一本口に咥え、火を点けた後、軽く吸い込んでから、煙と共に言葉を吐きだした。

「復讐」

そう言つて、ニヤリと笑った。

「私はね、とある妖魔の里の生まれなんだ。ただし、純粋な妖魔ではない。半分は人間の血肉でできている半魔の者だ。だから姿形は人間と大差がないし、妖気もほとんど漂うことがない。だから気づかなかつただろう？ 私魔の者だとは」

「……ええ、確かにその通りだわ」

口ではそう答えたが、怪しく感じたことはあった。迎えのリムジン車に乗った時、ほんの微かに魔の気配を感じたことがあったのだ。しかし、そのことに対して、深く考察しなかったのは、自分の落ち度だったとしかいいようがなかった。

暗魔誠一が、もう一度、タバコを吸った。今度は先ほどよりも深く、長くだ。それから、白い煙を大きく吐き出した。

「……私が生まれ育った里はね、いまはもう無いんだ。退魔師たちの襲撃を受けてね、里の長だった母親も、他の仲間たちも、みんな退魔師たちに皆殺しにされてしまったんだ。でも、ただひとり、隠れていた私だけが生き残った。一〇年前の話だ」

「一〇年前……」

妖子の内心で「まさか……」という感情が芽生えた。

それを察してか、暗魔誠一がニヤリと笑った。

「そう、私の里を襲った退魔師の集団というのは、君たち守部一族の者たちのことさ」

「それで復讐のためにわたしをここへ呼んだのね。依頼という形で……」

「納得してくれてうれしいよ。だが、それだけじゃない。いやむしろ、いまや君たち守部一族に対する復讐など、本当の「復讐」をおこなう上での副産物というべきかな」

そう言つて暗魔誠一は邪悪な笑いを深めた。

「最初は、君たち守部の一族を筆頭に、退魔師たち全員に復讐してやるつもりだった。

しかし、いまの退魔師たちの現状を知って、その気が失せた。互いに身を寄せ合い、傷を舐め合うように少ない依頼をこなしながら、雀の涙程度の報酬を受け取っては落胆するその姿は、まったく、哀れという言葉がよく似合うと思ったよ。敵愾心が消え失せ、同情の念すら覚えるほどね」

「……ッ！」

痛いところを突かれて、妖子は顔をしかめた。

そう、退魔業界はいま、空前の不況に喘いでいる最中だ。妖魔の数が以前よりも減り、それに比例するように依頼される仕事の量も減ってきて、数多くの退魔師たちが退魔業では食べていけないと去っていった。そして残った者たちは、暗魔誠一が指摘する通り、身を寄せ合いながら細々と生き残りの道を模索している最中だ。暗魔誠一が指摘する通り、哀れという言葉が似合う現状だ。

暗魔誠一が言葉を続ける。

「だから私は、行き場を失った復讐心を、もっと強大で、力のある別な対象に向けることにしたんだ」

「別な対象？」

「そう。この国だ」

そう言つて、暗魔誠一は笑った。

「この国はいま、明るくなり過ぎた。少なくなった妖魔たちが、怯えたように影でひっそりと暮らさなければならぬほどにね。だからもう一度、暗くしてやるんだ。この国を壊し、混乱させ、多くの人間を不幸にしてね。応仁、戦国、幕末、太平洋戦争時のように、魔が栄えた、かつての古き良き時代を再来させるために」

「そんなの、できるはずがない！」

「いや、できる。それも簡単にね」

悲鳴のような妖子の否定を、暗魔誠一は間髪入れずに一蹴してみせた。

「そんな、どうやって……」

「なに、単純なことだ。いま以上に格差を拡大させる。経済用語で言うところの「ワニの口」をもっと大きく開けさせるんだ。そのための方法は単純だが効果的だ。与野

党を問わず、無能だが、声だけはでかい政治家に多額の献金を与え、愚案を国会で通させる。マスコミを金と女で味方につけ、その法案をあたかも良案であるかのように見せかけると同時に、有能な政治家をスキャンダルで貶めさせる。愚案の中身は主に経済政策だ。富める者をより富ませ、貧しき者をより貧しくする。企業や富裕層、そして資本家たちに減税を施す一方、庶民に対しては増税をおこなう。所得税を一律で引き上げることと、消費税を引き上げることが一番、効果的だろうな。何しろ、私生活直撃するからね。消費が落ち込めば企業は生き残るため支払う給料の額を減らすだろう。そうなれば、庶民の生活はますます苦しくなる一方だ。消費の落ち込みをカバーするため、企業はあらゆる面で値下げをおこなうが、そのツケは社員の給料に反映される。すると、消費はますます落ち込むことになる。いわゆるデフレスパイラルという奴だ。この結果、日本社会はどうなるか。各地でリストラが相次ぎ、失業者が町中に溢れかえる。食べていけなくなり、犯罪を犯す者が相次ぐ。餓死者や一家心中が多発する事態も予測できる。これを実行するために、私はこの学園の支配者になったのだ」

暗魔誠一は言う。

魔孕学園は人間牧場だ。ここに入学した生徒や働いている職員たちは、全員が寄生タイプの妖魔に憑依されている。寄生タイプの妖魔は、気づかれないよう脳の一部に擬態して生徒たちの思考を変化させ、行動を操作する。これにより、生徒たちは異常が認識できないようになり、善悪の区別すら難しくなってしまう。そして妖魔たちを使役する暗魔誠一の号令が下れば、自らの意思を無くした生き人形と化し、ただ命令を実行するだけの存在へと成り下がるのだ。

「もちろん、寄生には問題が多々ある。妖魔に寄生された人間は将来的に脳腫瘍に罹

患する割り合いが増加するし、ほぼ一〇〇パーセントの確率で認知症を発症する。だが、副作用は悪いことばかりじゃない。知能指数が飛躍的に上昇し、学習能力が向上するという良い面もあるんだ。ゆえに、卒業生の中には現役で東京大学に入学した者が数え切れないほどいるし、すでに官僚として国家の中枢で活躍している者も多い。彼らが学園の評価と声望を高めてくれるおかげで、毎年入学者の獲得には苦労しないで済んでいるよ」

「……そして、妖魔に操られた元生徒たちを使って、先に言った計画を実行するというわけね」

「そう、その通りだ」

邪悪な笑みを顔に浮かべながら頷く。学園を巣立った生徒たちは、その後も暗魔誠一の駒として扱われ、国の中枢へと送り込まれ、そこで働くことになる。そして病原菌のように蔓延し、日本という国を中心部分から腐らせるよう行動するのだ。

「しかし、それだけじゃあない」

暗魔誠一は話を続ける。先に口にした計画が実行に移され、成功したとしても、日本人は行動を起こささないだろう。怒りはしても、仕方がないと諦め、政府に叛旗を翻さないはずだ。なぜならば、日本人は、上に従順で、逆らわない民族だから。

「そこで我々妖魔たちが後押しをする。政府を倒せ、富める者を殺せ、と。そして、日本各地で無差別殺人を実行に移す」

標的となるのは国の中枢にいた人間たちだ。国会議員、官僚、大企業の社長や役員、資本家、金持ち、そして公務員など、いわゆる「勝ち組み」といわれる人間たちを抹殺してゆく。その結果どうなるか。上の人間たちは下の人間たちの反抗（犯行）だと思ひ込み、徹底的に弾圧することになるだろう。冤罪が多発し、無辜の人間がろくな

裁判も受けられず刑務所へとぶち込まれてゆく。不安と恐怖が蔓延し、混乱に拍車がかかる。そして、対立がより深刻化していくことになるのだ。

「そして日本は暗黒の社会と変貌してゆくだろう。狂気と恐怖に覆いつくされてね。そして我々は、次の行動へと移行することになる」

そう言って、暗魔誠一は立ち上がった。

「さて、この先の話は企業秘密で、私のくだらないお話はここまでだ。次は君の番だよ、守部妖子君」

そう言って、暗魔誠一が妖子に向かって何かを放り投げた。

「！」

思わず受け取ったソレは、なんと妖子の刀であった。

「これは……なんのつもりなの？」

「うむ。これから君にふたつの選択肢を与えたいと思う」

「ふたつの選択肢？」

「そうだ。もし、これ以上の苦痛を望まないというのであれば、私に屈して恭順の意思を表明したまえ。そうすれば、その下品な胸も治してやるし、かつての恨みを水に流してこれから訪れる新世界で相応の生活と地位を与えることを約束しよう。逆に、歯向かうというのであれば、止めはしないから、その刀でもって全力で私に抗うがい。実力でもって私を倒すことができれば君の勝ちだ。ただ——」

「ただ……？」

「負ければ死ぬよりも酷い目に遭うことだけは、覚悟したまえよ」

「……！」

一瞬、背筋がゾクツとなった。

しかし、退魔師として、人を魔の者から護る者として、逃げだすわけにはいかなかった。

妖子が刀を抜いた。そして構える。

「守部一族最後の退魔師・守部妖子、押して参る！」

その言葉を聞いて、暗魔誠一がニヤリと笑った。

「君の気持ちは理解した。いいだろう。さあ、来い。全力でもって、ねじ伏せてやる」

続きは本編でお楽しみください。